

「大丈夫です」の用法の拡大に関する研究 — 不利益を想定して気遣う言語行動 —

尾崎 喜光

1. はじめに

近年用法と使用頻度を拡大している表現のひとつに、他者からの勧めを断わる状況などで用いられる「大丈夫です」がある。たとえば、食堂で店員さんからお茶のお代わりはどうかと聞かれてもう要らないので断わる時、「あっ、結構です」や「あっ、もう十分です」などと言う代わりに「あっ、大丈夫です」と言うことがある。

最近も次のような用例を耳にした。筆者があるビルで下りエレベータに乗っていたときのことであるが、途中の階で止まりエレベータに乗り込もうとした若い女性が、エレベータがほぼ満員であり自分は乗れないと判断し、先客である我々に対し「あっ、大丈夫です。」と言った。筆者であれば、「あっ、いいです。」とか「あっ、どうぞ。」(＝どうぞドアを閉めて先に降りてください)とでも言う場面である。

「大丈夫です」という表現自体は以前からあった。たとえば、道を歩いていて躓き転んだ人に対し近くの人「あっ、大丈夫ですか?」と尋ねる。聞かれた側も大したことがなければ「あっ、大丈夫です」と答える。友達や家族同士であれば丁寧語無しの「大丈夫?」「うん、大丈夫」というやりとりになる。

このように従来は、応答する場面においては、「自分は困った事態にはない」とか「自分には問題や懸念すべきことはない」というような意味で使われていた。現在はこれに加え、他者からの勧めを断ったり辞退を述べる場面などでも使われるようになってきている。

こうした拡大用法に対する違和感は、どちらかという上世代の人が持つようである。岡山県の地元紙『山陽新聞』の2016年5月12日付の「夕刊エッセー」には、岡山市在住の1950年生まれの女性が「だいじょうぶ」という題名で、この表現についての身近な体験談を紹介している。あるイタリアンの店で、自分の斜め前のカップルの男性が、ウェーターがピザを運んでくるたびに「だいじょうぶ」と言って断っていること、自分はこの状況では「いりません」「結構です」と言うことからこの言葉に一瞬驚いたこと、自分の長男も、朝食時に紅茶のお代わりを勧めたところ「ノー」の意味で「だいじょうぶ」と言っていたことを紹介している。

読者の投稿だけでなく、新聞の編集サイドがこの表現を取り上げることもある。『朝日新聞』の2013年6月1日付の「RANKING」では「気持ちが悪い日本語」をテーマとしているが(担当は中島鉄郎記者)、同社のウェブサイトでのアンケートによると、「コーヒーで大丈夫ですか」「(「コーヒーでいいですか」という確認表現)のような「大丈夫ですか」が第8位である。気になる人が多い新しい用法であることがわかる。同紙2014年1月18日付の「be report」では、「乱発される「大丈夫」の研究」という見出しでこの表現を再度取り上げている(担当は中島鉄郎記者)。「大丈夫ですか」

が一連の会話場面で万能の表現のように使われていることについて読者の実話を紹介するとともに、記者自身による街中での観察調査の結果と、相手への問いかけとともに問いかけへの返事でも使われていることを指摘している。

現代小説の登場人物のセリフにもこの表現が見られる。多重人格と自己犠牲をテーマにした百田尚樹の『プリズム』（2011年、幻冬舎）には、次のような用例が見られる（ページは幻冬舎文庫版）。(2)は従来用法、(1)と(3)は新しい用法である。

- (1)「私が邪魔ではないですか?」「大丈夫です。」(p.158)【「邪魔ではない」「ここにいっしょに居てもかまわない」の意】
- (2)「先生は大丈夫だったんですか?」(p.163)【「危害を受けなかった」の意】
- (3)「お時間は大丈夫なんでしょうか?」(p.165)【「問題ない」「迷惑をかけない」の意】

こうした用法の変化(拡大)を受け、これについて注記した国語辞書も出てきた。語の規範的な意味や用法のみならず誤用についても積極的に取り上げ、その要点や発生の背景を解説することを編集方針の一つとする『明鏡国語辞典 第二版』(2010年、大修館書店)では、「大丈夫」に「俗」(俗語)とした上で次のように解説している。

相手の勧誘などを遠回しに拒否する語。結構。「『お一ついかが?』『いえ、一です』『砂糖は二個?』『いえ、一です』」そんな気遣いはなくても問題はないの意から、主に若者が使う。危なげがない場面で使う用法で、本来は不適切。

このように、多くの人に違和感を持たれながらも、勧めの場面や勧めへの断わりの場面において、あるいは「問題ない」と伝える場面において、実際の会話や小説のセリフとして急速に普及・定着しつつあり、国語辞書にも注釈が見られる「大丈夫」であるが、現在どの程度の割合の人が使っているのかとか、性差や年齢差がどのようであるのかについてはいまだ十分明らかになっていない。

そこで本稿では、日本全国ではなく岡山市という特定地域ではあるが、同市で無作為抽出した多人数を対象とした質問紙調査により、対立する従来表現の使用と対比しつつこの表現の使用を問うた設問への回答を分析することで、「大丈夫」の浸透状況を社会言語学的観点から明らかにする。

2. 調査概要

調査は2013年10月に民間の調査会社に委託して実施した。回答者は、無作為に選ばれた、調査当時20歳～79歳の男女81人である。調査方法は、調査票を用いた個別面接法である。^{注1}

フェイスシート項目を分析したところ、回答者のうち約7割は岡山県出身者であった。また、言語使用や言語意識を形成する上で重要な要因となると考えられる15歳までに最も長く住んだ場所も8割近くは岡山県であった。すなわち、出身地についても15歳までの最長居住地についても、岡山県を地理的背景とする回答者を7～8割含むデータである。母集団もおおむねこのような比率であると推定される。

なお、調査サンプルの代表性はおおむね確保されていることの説明と調査の詳細については、本調査の最初の分析論文である尾崎喜光(2014)で報告している。

本稿で分析対象とするのは、次の枠内に示した2つの設問に対する回答である。(な

お、ここに示してない(1)は本稿と関係のない設問である。

最初の設問(2)では、友達に対し「ソースをかけてもよいか」と尋ねる状況での「だいじょうぶ?」の使用について、これと対立する従来の代表的表現の使用も含めて問うた。なお、「いい?」については、西日本の方言形「ええ?」も想定されることから、これも選択肢とした。回答者には、ア～ウの選択肢が書かれた「回答票45」を提示し、回答者自身で言うことがあるものを全て選ばせた。なお、調査票にある「どれも言わない」は、回答者に提示した回答票にはない。もし回答者がどれも選ばなかった場合に、調査員がこれに○を付けた。

この他の有力な表現として「かまわない?」や「かまわん?」「かまん?」も想定されるが、本調査票を作成した時点では思い至らなかった。

Q 5. あともう少し、ふだんの会話での言い方についてお聞きします。

(2) [回答票 45] 友達と食事に行ったとします。いっしょに注文した料理が出て来ました。おいしそうなソースが付いて出てきたので、かけてもいいかと友達に尋ねるとします。次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。(M. A.)

- 1 (ア) (ソースかけても) いい?
- 2 (イ) (ソースかけても) ええ?
- 3 (ウ) (ソースかけても) だいじょうぶ?
- 4 どれも言わない

(3) [回答票 46] 食事を食べ終わったら店員さん近づいて来て、お茶のお代わりはどうかと聞きました。もういらないので断わるとします。次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。(M. A.)

- 1 (ア) (あっ、) けっこうです。
- 2 (イ) (あっ、) だいじょうぶです。
- 3 (ウ) (あっ、) いません。
- 4 どれも言わない

一方、後の設問(3)では、店員からの勤め的な問いかけに対し「いらない」と応答する状況での「だいじょうぶです」の使用について、これと対立する従来の代表的表現である「けっこうです」や「いません」の使用も含めて同様に問うた。

このように本調査では、次の2つの状況での「だいじょうぶ」の使用を調査した。

- ①他者(友達)に尋ねる状況での「だいじょうぶ」(質問場面)
- ②他者(店員)からの勤め的な問いかけに対し不要だと述べる状況での「だいじょうぶ」(応答場面)

ただし、発話状況の違いに加え、①は友達に対する場面であるのに対し②は店員に対する場面である(それゆえ語形も丁寧語を含むものとした)という違いもある。

3. 調査結果

(1) 友達に尋ねる状況での「だいじょうぶ?」

回答者全体の結果は図1のとおりであった。グラフの数値は「言うことがある」と回答した人の比率、すなわち使用者率である。どれも選ばない回答者はいなかった。

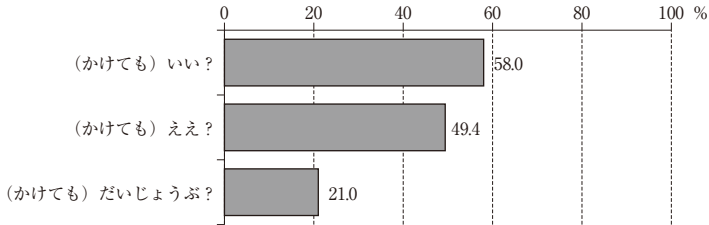


図1 「だいじょうぶ?」等の使用者率(全体)

これによると、友達と一緒に食べる料理にソースをかけてよいかと確認する状況において「だいじょうぶ?」を使う人は約2割いることが確認される。最近の用法であるため使用者率は高くはないものの、確かに一定の割合使用者がいる点は注目される。

これに対し従来の「いい?」の使用者率は約6割、その方言形である「ええ?」も約5割であり、「だいじょうぶ?」との数値の開きが大きい。このような状況では「だいじょうぶ?」と尋ねるよりも、「いい?」や「ええ?」と尋ねることの方が現在でも普通であることもまた確認される。

これを男女別・年齢層別に分析したのが図2である。各層に含まれる回答者を一定数以上確保するため、年齢層は「20・30代」「40・50代」「60・70代」という区切りによる3層とした。

この年齢層別グラフの右側に、男女に分けた上で年齢層別に集計した結果をさらに示した。各層に含まれる人数がかなり少なくなることから数値は不安定となるが、数値というよりも大きな傾向を見るための資料として示した。このうち女性については、本調査のおよそ3年後となる2016年6月に、本学で筆者の講義を受講している女子学生94人(=有効回答数;留学生および社会人入学者は除外)に対し同様の方法と質問により調査した結果を「女性・大学生(94人)」として接続した。3年前の調査対象が岡山市在住者であるのに対し、今回の調査対象には岡山市以外在住の者も含まれていることが考えられるため厳密には接続しがたい。しかしながら、他の授業において毎年行っている言語意識調査によれば、本学の学生の多くは岡山市出身であり、従って居住地も岡山市である者が多いと推測されることから、3年前のデータとおおよそ同質のさらに若い年齢層のデータが多数含まれているものと判断し接続した。回答者の年齢は、18歳57%、19歳31%、20～23歳12%であった。また、回答者の出身地は、岡山県69%、香川県11%、広島県9%、兵庫県4%、その他7%(各県1人)であった。さらに、回答者の現在までの最長居住地は、岡山県77%、香川県11%、広島県5%、兵庫県3%、その他4%(各県1人)であった。

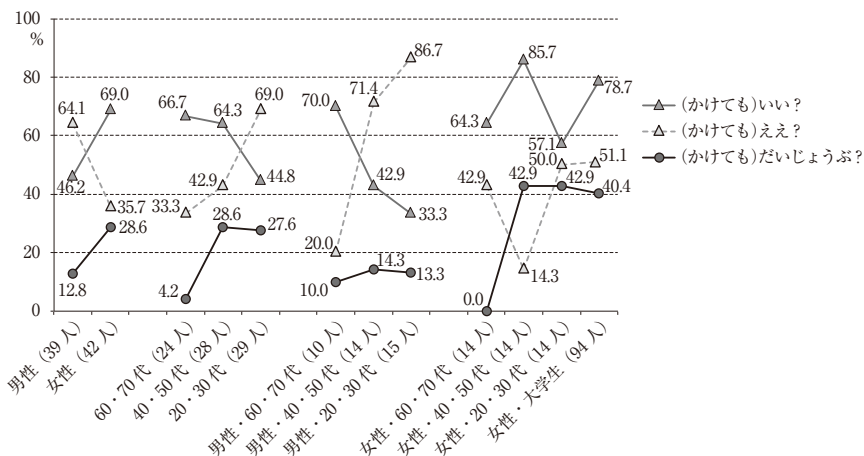


図2 「だいじょうぶ?」等の使用者率(男女別・年齢層別)

まず男女別の分析結果を見ると、「だいじょうぶ?」の使用者率は男性が約1割であるのに対し女性は約3割であり、この表現は男性よりも女性で使用者率が高いことがわかる。ただし、相対的に数値の高い女性においても、「だいじょうぶ?」よりは「いい?」「ええ?」の方が数値が高い(特に「いい?」)。なお、本稿の中心的課題ではないが、「いい?」と「ええ?」の関係を見ると、男性は「ええ?」の方が数値が高いのに対し、女性はむしろ「いい?」の方が数値が高く約7割に達する。すなわち、「いい」「ええ」の使用については、男性は方言形に傾くのに対し女性は共通語形に傾くという対比が明確に認められる。

次に年齢層別の分析結果を見ると、「だいじょうぶ?」を使う人は60・70代では4.2%と非常に少ないことがわかる。これが40・50代以下では3割ほどにまで上昇する。この年齢差は、この表現が現在岡山市において普及しつつあることを示しているものと考えられる。なお、「ええ?」にも同様の傾向が認められる。「ええ?」は以前から使われていた方言形であり最近普及しつつある表現というわけではないことから判断すると、中高年層で「ええ?」よりも「いい?」が優勢であることがこの年齢差を生んでいるものと考えられる。ただし、一般に共通語形は若年層において優勢であるのにそれと逆になっている理由は、現在のところ十分にわからない。

「だいじょうぶ?」を中心に、性別×年齢層別の分析結果を見ると、男性はどの年齢層でも数値が非常に低いのに対し、女性は40・50代以下で数値が大きく上昇することがわかる。すなわち、このような状況での「だいじょうぶ?」は、おもに中年層以下の女性の間で使われ始めた用法だと考えられる。ただし、大学生の数値は20・30代とほぼ同じ約4割であり上昇は特に見られないことから判断すると、確かに普及しつつあるもののその勢いには限界も見られ、少なくとも現在においては、若年層

女性に向けての一般化にまでは至っていないものと考えられる。

(2) 店員からの勤め的な問いかけに対し不要だと返答する状況での「だいじょうぶ」回答者全体の結果は図3のとおりであった。グラフの数値は「言うことがある」と回答した人の比率、すなわち使用者率である。どれも選ばなかった回答者が1人いる。

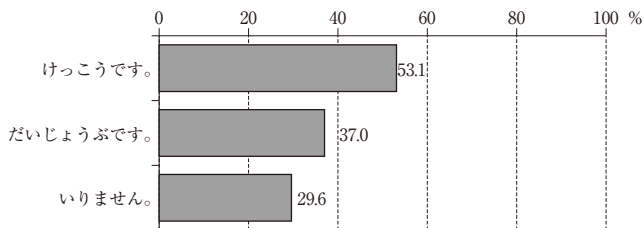


図3 「だいじょうぶです」等の使用者率（全体）

これによると、店員に対しお茶のお代わりは不要だと返答する状況において「だいじょうぶです」を使う人は4割近くいることが確認される。使わない人の方が割合としては多いものの、使う人も現在ではかなりいる。先に見た、友達に確認する状況での使用者率は約2割であったことと比べると、使用者率は2倍近くになり、その異なりも注目される。同じく新用法としての「だいじょうぶ」であっても、使用者率は状況によりかなり異なるようである。本調査ではこの2場面のみの調査にとどまったが、今後は場面による異なりがどのようなものであるかを精査する必要がある。

これに対し従来の「けっこうです」の使用者率は約5割であり、現在においても「だいじょうぶです」よりも一般的である。もっとも、これを「約5割にとどまっている」と見ることもできる。以前であればもっと多くの人々が「けっこうです」を使っていた状況から、「だいじょうぶです」の普及によりその使用が衰退しつつある可能性が考えられる。もう一つの「いりません」は使用者率が3割にとどまり、「だいじょうぶです」よりも現在劣勢となっている。店員から「い（要）るか？」という主旨のことを尋ねられたわけであるから、本来であれば「いりません」は応答の表現として適切であるはずであるが、その表現が持つ直接性が「拒否」や「拒絶」のニュアンスを帯びているため、店に来た客という、ある意味で自分は上の立場の者であっても、店員には使いにくいと意識する人が少なくないためと考えられる。

これを男女別・年齢層別に分析したのが図4である。

まず男女別の分析結果を見ると、「だいじょうぶです」の使用者率は男性が約3割、女性が約4割であり、この場面においても使用者率は男性よりも女性で高いことがわかる。複数場面において同一傾向の男女差が見られるということは、「だいじょうぶ」の使用はさまざまな場面において男性よりも女性に多い可能性が考えられる。ただし、男女差の度合いは図1ほど大きくない。これは、友達に「だいじょうぶ？」と聞くことはいけれども、店員には「だいじょうぶです」と応答する人が男性に特に多いこ

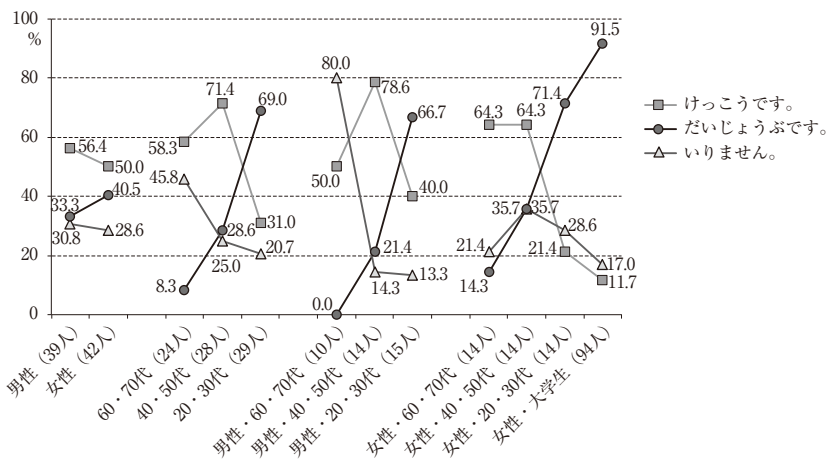


図4 「だいたいぶです」等の使用者率（男女別・年齢層別）

とを示唆しているものと考えられる。この点については、両者の組み合わせという観点からデータを分析したこの次の箇所において検討する。なお、相対的に「だいたいぶです」の数値が高い女性においても、また男性においても、「だいたいぶです」以上に従来の「けっこうです」が優勢である点も注目される。特に男性においては、「だいたいぶです」よりも「けっこうです」にかなり傾く。

次に年齢層別の分析結果を見ると、「だいたいぶです」を使う人は60・70代では約1割と少ないことがわかる。これが40・50代では約3割にまで上昇し、20・30代では約7割にまで達する。一方、40・50代以上で優勢な「けっこうです」は20・30代で約3割、「いりません」も約2割にまで縮小する。若い世代では従来の表現に代わり「だいたいぶです」がかなり一般化していることがわかる。こうした年齢差は、現在岡山市で、「けっこうです」を中心とする従来の表現が衰退し、それらに代わって「だいたいぶです」が普及しつつあることを示しているものと考えられる。

「だいたいぶです」を中心に、性別×年齢層別の分析結果を見ると、男女とも若年層向け数値が一貫して明確に上昇していることが確認される。使用者率こそ男女で異なるが、この表現の普及は男女ともに見られる現象である。先に見た友達に尋ねる状況での「だいたいぶ？」は、男性は若年層でも使用者率がそれほど上昇しないが、店員に対する「だいたいぶです」は上昇することから、前者では言わないが後者では言うという人が、若年層を中心とする男性で少なくないものと考えられる。

女性においては大学生の数値の高さが著しく、約9割に達する。これに対し「けっこうです」「いりません」は2割以下にまで衰退する。若い女性にとってこうした場面での「だいたいぶです」は、今ではごくふつうの表現となっている。

(3) 友達に対する「だいじょうぶ?」と店員に対する「だいじょうぶです」の関係
最後に、ソースをかけてもよいかと友達に尋ねる状況での「だいじょうぶ?」(以下では①)と、店員に対しお茶のお代わりを断わる状況での「だいじょうぶです」(以下では②)の使用率を比較して示すと図5のようであった。

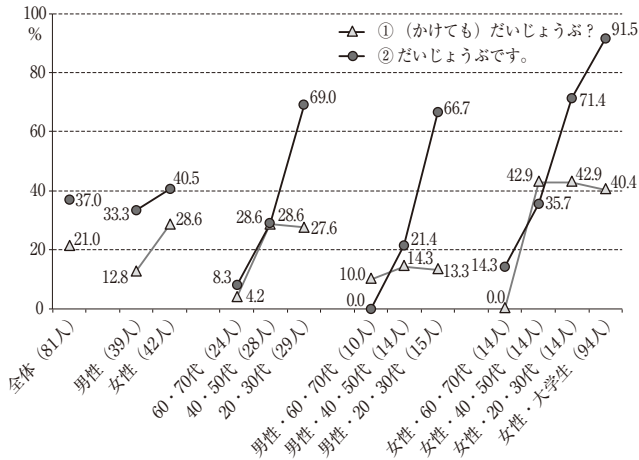


図5 「だいじょうぶ?」と「だいじょうぶです」の比較

全体としては①が約2割であるのに対し②は約4割であり、使用者率は②の方が高い。これは、①の状況では「だいじょうぶ?」を使わないけれども②の状況では「だいじょうぶです」を使うという人が一定の割合いることを示唆する。この点については、次の段階の分析において確認する。

これを男女に分けて分析した場合も、①よりも②の方が数値が高い傾向が見られる。特に男性における両者の差は著しく、およそ1対3である。①の状況では「だいじょうぶ?」を使わないが②の状況では「だいじょうぶです」を使うという人が女性以上に多くの割合いることを示唆する。

年齢層別に見ると、40・50代以上では①も②も数値は低めであり、かつ両者の数値の差も小さい。これに対し20・30代では、①は約3割にとどまったままであるのに対し②は約7割にまで上昇する。すなわち、上記の①と②の違いは、若年層である20・30代において、①の状況での「だいじょうぶ?」は一つ上の年齢層以上には広まらないのに対し、②の状況での「だいじょうぶです」は大幅に広まるのが大きな要因となっている。「だいじょうぶ」はさまざまに状況において用法の拡大が見られるが、とりわけ店員の勧めを断わる状況での用法は若年層の間での普及が著しく、現在では一般化の一手手前といった状況である。この状況は、男女に分けて年齢層別に分析しても確認されることから、若年層では男女に共通した傾向である。女性については今回大学生を追加調査したが、その数値は9割に達し、女子大学生の間ではほぼ一般化した

用法と言ってよい状況である。なお、①の「だいじょうぶ?」は、男性においてはどの年齢層でも数値が低く普及はあまり見られないのに対し、女性においては40・50代以下で4割程度までは普及しているという違いも見られる。ただし、②に見られたようなより若い年齢層への使用者率の増加は認められない。今後の動向が注目される。

上記の分析に関連し、ソースをかけてもよいかと友達に尋ねる状況での「だいじょうぶ?」と、店員にお茶のお代わりを断わる状況での「だいじょうぶです」の使用を組み合わせて分析した結果が図6である。凡例のうち「○」は「使う」、「×」は使わないという意味である。以下では、これを簡略化した「○-○」等の表記を用い、おもな傾向を見てゆく。

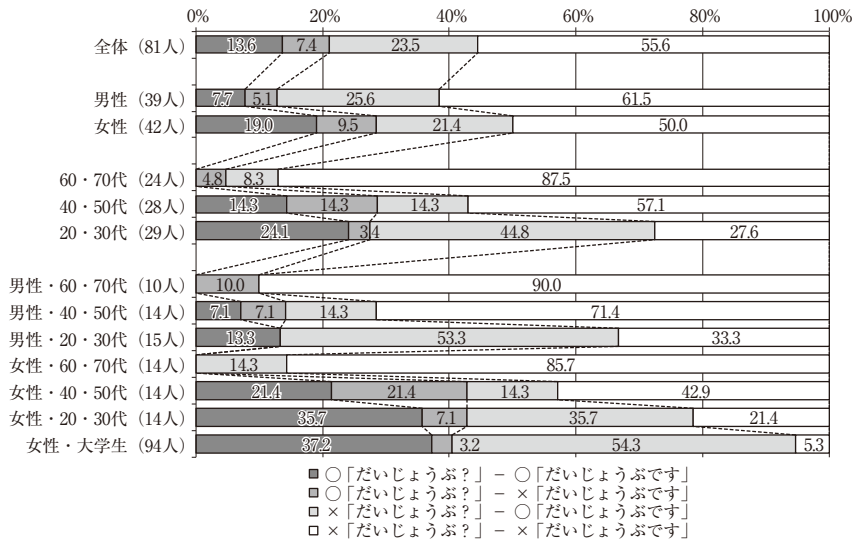


図6 「だいじょうぶ?」と「だいじょうぶです」の使用パターン

全体としては「×-×」すなわちいずれの状況でも「だいじょうぶ」を使わない人が最も多い。その数値は半数を超え、現在においても従来のこのパターンが最も優勢である。これに対しいずれの状況でも「だいじょうぶ」を使う「○-○」は1割強にとどまる。一定の勢力を持ちながらも、全体としては現在のところまだ萌芽期の状況にとどまっている。これらの中に位置づけられる「○-×」と「×-○」を見ると、数値は大きく後者に傾く。すなわち、友達に尋ねる状況では使わないけれども店員に断る状況であれば使うという人が少なからずおり、その割合は2割以上を占める。

これを男女別に見ると、「×-×」は男性の方が多いのに対し、「○-○」は女性の方が多くという男女の傾向の違いが認められる。特に女性の「○-○」は男性の約2倍となっている。複数の使用場面の組み合わせという点においても、男性は従来の用法に傾くのに対し女性は新用法に傾くという違いが認められる。

次に年齢層別に見ると、60・70代では「×-×」が9割近くを占めるのに対し、若年層になるに従いその割合は減少し、代って「×-○」や「○-○」が勢力を伸ばしてくる。特に20・30代では「×-○」が半数近くを占め、従来の「×-×」を大きく上回っている。60・70代では見られなかった、いずれの状況でも「だいじょうぶ」を使う「○-○」も2～3割にまで増加する。こうした年齢差は、岡山市での現在の言語変化を反映しているところが少なくないものと考えられる。おもには店員に断る状況において、さらには友達に尋ねる状況においても、「だいじょうぶ」の用法が拡大しつつあると考えられる。

男女に分けた上で年齢層別に分析すると、次のような傾向が見られる。男性も女性も60・70代では「×-×」が非常に優勢であるが、若年層になるに従い男女ともその勢力を減じる。特に女性における衰退は著しく、その傾向はさらに女子大学生へと続く。女子大学生における「×-×」は1割にも満たない。

これに代って若年層に向けて伸長してくるバタンは男女でやや異なる。すなわち、男性では、店員に断る状況であれば「だいじょうぶ」を使う「×-○」が大きく勢力を伸ばしてくる。これに対し女性では、それに加え、いずれの状況でも「だいじょうぶ」を使う「○-○」も、それとおおよそ同じ勢力を持ちつつ勢力を伸ばしてくる。ただし、20・30代から大学生にかけては、「×-○」はさらに勢力を伸ばすのに対し、「○-○」にはそのような傾向は見られない。20・30代の回答者数が少ないため確実なことは言いにくいだが、店員に断る場面だけでなく友達に尋ねる場面でも「だいじょうぶ」を使う人は、現状以上には勢力を拡大しない可能性が考えられる。今後の動向が注目される。

4. 「だいじょうぶ」の普及の要因

以上、岡山市民(81人)および本学の大学生(94人)を対象に最近実施した調査から、新用法としての「だいじょうぶ」に関する回答を分析したところ、現在岡山市で女性や若年層を中心に勢力を伸ばしてきていることを見た。

ではなぜこうした新用法が生まれ、普及してきているのであろうか。次にその要因を検討するが、その前に、岡山市以外での「だいじょうぶ」の使用状況がどうかについて、先行研究から確認しておこう。

塩田雄大・井上裕之・滝島雅子(2015)は、NHK放送文化研究所が2014年に実施した「ことばのゆれ調査」(全国調査)において「大丈夫」の新用法を調査した結果を報告している(執筆担当は塩田雄大氏)。回答者には、本調査で設定したお茶のお代わりを店員に断る状況とは逆の状況、すなわち店員が客に尋ねる状況での「(お水のおかわりは大丈夫ですか)」という表現を提示し、この表現についての評価意識(おかしいかおかしくないか)と使用意識(使うか使わないか)を問うている。このうち使用意識の結果を見ると、「使う」と回答した人は38%であった。この数値は、2013年に行なった岡山市での調査のうち、店員にお茶のお代わりを断る状況での「だいじょうぶです」の使用者率37.0%とほぼ同じである。お茶のお代わりを尋ねたり断ったりする状況で「だいじょうぶ」を使用する人は、全国を見ても一地方都市である

岡山市を見ても、現在およそ4割ほどいるということになる。なお、NHK放送文化研究所では2002年にも同様に調査しているが（塩田雄大2003）、その時点で「使う」と回答した人は21%であり、この12年の間に17%増加している。2014年の調査で「使う」と回答した人の割合を年齢層別に見ると、若年層になるほど数値の増加が見られ、岡山市と同じ傾向である。ただし、30代で58%、20代でも55%であり、30代以下では増加の勢いが失われているようである。この点は、友達にソースをかけてもよいかと尋ねる状況での岡山市での使用者率が、40・50代以下では約3割にとどまっている状況と似ている。若年層に向け使用者率が一層増加するか、それとも一定以上は使用者率が増えずに頭打ちとなるかは、今後注目してよい点であろう。なお、岡山市の調査では男女差が見られたが（使用者率は女性の方が高い）、この調査では、多少男性の方が数値が高いものの、男女差はほとんどない。これは、男女差については地域差がある可能性を示唆しているようにも理解される。これも今後の注目点である。

従来の用法がなされる場面も含め、ある程度多数の場면을回答者に想定させて調査した研究もある。高橋宗一郎・竹下浩子（2014）は、「大丈夫」の新用法が若年層を中心に広まってきていることに注目し、創価大学の学生およびそれと同世代の社会人を中心とする10代から70代までの男女189名（うち20代が74%）を対象に、10の対人場면을想定させた上で、回答者自身の「大丈夫」の使用頻度、聞く頻度、意味の理解の3点について、2012年にアンケートにより調査した。10の対人場面のうち、患者が医師に対し「今日は風呂に入っても問題ないか？」と尋ねる場面での「大丈夫」と、岡山市での調査と設定場面が非常に近い、店員からコーヒーのおかわりかどうかと尋ねられて要らないと断わる場面での「大丈夫」等の結果を報告している。本来の用法と考えられる前者の場面では、年齢にかかわらず8割以上が「よく使う・ときどき使う」と回答しているのに対し、後者の場面では年齢差が顕著に見られる。「よく使う・ときどき使う」の割合は50代以上では3割未満にとどまるのに対し、30～40代では6割、10～20代では8割以上に達する。回答の求め方が岡山市での調査と異なる等の事情もあり数値こそ異なるが、年齢層別の傾向は岡山市と同様である。この他、話題の人物Cを飲み会に誘うかと問われ否定的に答える場面での「大丈夫（じゃない？）」も、「よく使う・ときどき使う」の数値は全体的に低くなるものや若年層になるほど数値が上昇すること、またコンビニのレジでレシートは不要である旨を告げる場面での「大丈夫」は、年齢差についての言及はないものの、「よく使う・ときどき使う」は若者世代で9割近くと非常に高いことを報告している。上記のうち「飲み会」の場面でも「大丈夫」が使われることを考えると、直接的な言い方を回避する配慮というよりも、当該の人物（第三者の場合もあれば話し手自身や話し相手の場合もある）への心遣いを想定し、そのような心遣いは不要であるとする「心遣いへの配慮」の可能性も考えられる。使用者の意識や普及の背景についてはなお検討の余地があると考えられるものの、使用頻度に違いこそあれ、断わり場面のみならずさまざまな場面において「大丈夫」が使われていることを、普及の裏付けとなる年齢差を含めて明らかにしている点は注目される。

さて、複数の調査において普及が確認された拡張用法の「だいじょうぶ」の本来の

意味は「あぶなげのないさま」「問題のない状態」であることをふまえつつ、現在ではそうした状況以外の多様な言語場面においても「だいじょうぶ」が使われつつある理由を検討する。その主要な理由は、話し手が相手の不利益（すなわち問題のある状態）を想定し、その状態を気遣い解決しようという、従来なかった論理による対人配慮意識にもとづくのではないかと考えられる。

たとえば、店員から客に対する「お茶のお代わりはだいじょうぶですか？」は、単に「お茶のお代わりは要るか／要らないか？」と尋ねているのではなく、客がお茶のお代わりを求めているという現状認識からまず出発し、そのようであるのは、客が店側に遠慮していたり、お代わりが可能であるということを知らなかったり、あるいは客が自分のお茶が少なくなっていることに気づいていないためかもしれないと想定し（つまり問題のある状態を想定し）、本来受けられるサービスを受けていないという意味で、客であるあなたは不利益を受けているが、それでも問題ないかという意識で尋ねているのではないかと考えられる。つまり、相手の不利益や問題のある状態を想定し、そのままでもよいのかと気遣う言語行動ではないかと考えられる。

これに対する客の「だいじょうぶです」も、単に「要らない」と言っているのではなく、お茶のお代わりをしない自分は不利益を受けている状態だと認識した上で、しかしながらお代わりをしなくても自分は特に問題がないと述べているものと考えられる。つまり、自分の不利益や問題のある状態を想定した上で応答しているのである。

冒頭のエレベータでの「大丈夫です。」も、単に自分を乗せずに先に降りるようにと先客に言っているのではなく、自分がエレベータに乗れないことは自分の不利益だと認識した上で、しかしそれでも問題はない（次のエレベータを待てばよい）と述べているものと考えられる。相手が自分に気遣うのを想定した言語行動という面もある。

「ソースかけてもだいじょうぶ？」も、単にソースをかけてよいかと尋ねているのではなく、相手はソースをかけたくないと思っているかもしれないと想定し、その場合ソースをかけると相手に不利益が生じることになることから、「ソースをかけても問題ないか？」という意識で「だいじょうぶ？」と尋ねているものと考えられる。

現代の若者は、友達といえども（あるいは友達だからこそ）気を遣う世代である。とりわけ迷惑をかけるということには敏感である。そのような対人意識の変化が、「だいじょうぶ」の用法の拡大と使用頻度の増加をもたらしているものと考えられる。

注1 岡山市での調査は、2013年度学内研究助成金（研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」）により行なったものである。

参考文献

- 尾崎喜光 (2014) 「岡山における連母音の融合状況 (2) - 「岡山市民調査」から見る -」『清心語文』16
塩田雄大 (2003) 「『新興台頭表現』の属性差とメディアア－っていうか、ヤバくない? - 「近年の言語変化」全国調査から (1) -」『放送研究と調査』53-4
塩田雄大・井上裕之・滝島雅子 (2015) 「『お赤飯』“ひと段落” “ロケットが打ち上がる” はおかしいですか - 2014年「ことばのゆれ調査」から② -」『放送研究と調査』65-3

高橋宗一郎・竹下浩子（2014）「若者言葉から見る配慮とは－「大丈夫」についての考察－」『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性 第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集』（ココ出版）

（おざき よしみつ／本学教授）

キーワード＝岡山市、多人数調査、言語変化